

「鬼の霍乱」風邪をこじらして

酒井 董美^{ただよし}

最近、体調を崩したことのなかった筆者であったので、ついうっかり風邪を引き込み。年末から年始にわたって寝込んでしまった。まさに「鬼の霍乱^{かぐらん}」である。

今日は一月三日。外を眺めれば太陽の輝く青空である。

暮れの26日夜の検温では37・6℃。27日午後になっても熱が下がらないので、年末年始は個人医院は休診になるので、急いでかかりつけの医院で診てもらい、コロナ蔓延という時期が時期だけに37・5℃以上の者はPCR検査が義務づけられているからと松江医師会館所属の附属施設へ、紹介状を持って検査を終え、「結果は明日主治医へ知らせます」と言われて帰宅。翌日、主治医から「陰性でした」と連絡があったものの、発熱は続き、37℃〜39℃代で推移しているところである。



マンションのベランダから南西方向を望む（1月3日朝）

ようとして一人では立ち上がることが出来ない。これには弱った。ごく近くに座り炬燵^{たきだん}を置いてもらい、横に転がってそこまで行き、やっと立ち上がることが出来る体たらくである。次にえらかったのはメールへの返信である。中にはFacebookでくださる方もあるが、これらは開いて写真を見て、それから返事を書くのであるが、だいたいは過去の思い出とか釣りの成果を見るのが多く、こちらとしては身体が苦しく非常事態であるため、悠長な返事をするのも億劫なので、初めから無視して開かなかつたり、Facebookではない個人メールには、簡単に実情を記し、返信した。その結果、見舞いのメールが来るのでいちいち書く元気がなく、簡単に感謝するだけにとどめておいた。

次には年賀状である。筆者も80歳になったのを機会に「年賀状を次年から辞めます」と数年前に宣言はしておいたものの、やはり、未だにくださる方も多い。特に新しく知り合って、筆者が辞めていることを知っておいででない方からのものもある。

そのようなことで元日に到着した中で、単なる儀礼的なものは除いて、返事をしておかないと失礼にあたるものが、64枚あった。コピー機で原稿を複製し、一人一人の当て先を「筆まめ」で印字し、出来上がったのに自筆でその人に添った一筆文を書いてやっと完成。家内に頼んで投函してもらったところである。年賀状は今日午後からも来るだろうから、ここ数日、この作業は必要になると覚悟している。

久しぶりで病気になった。そのため大好きな雑煮も、さっぱり食べる気持ちにならない。雑煮を楽しみ正月気分にはたれるのは、明日以降に持ち越しの新年になってしまった。読者のご多幸を祈りながらの筆者の本日である。（元島根大学法文学部教授）